授業づくりグループ⑤

ダンス活動を通した人との豊かなかかわり

中田圭子
研究協力者：吉川一義（金沢大学教育学部）　稲生玲子（金沢大学生）
徳山華代（市内バレエ教室主宰）

1．はじめに

ロフトベッドに、パソコンスペース、学習スペースに、各個人のブース。子どもによりわかりやすく居心地のいい環境を大切にした教室の構造化は、各校で取り入れられるようになった。今年度の小学部２組は、２年生から４年生の個性豊かな子どもたち。６人が充分自分色を発揮できるように担任２人でたくさんの人から示唆を受けながら、できる限り６人それぞれが気に入る教室環境を整えた。一方では、活動内容と教師を含めたクラスの仲間との関係が重要。次は、何をやりたいかな？一緒に活動する人は誰？と活動を選抜。昨年度は、中学部で研究したダンス活動だったが、今年度はこの中の３人と一緒に新たなスタートラインに立つことにした。

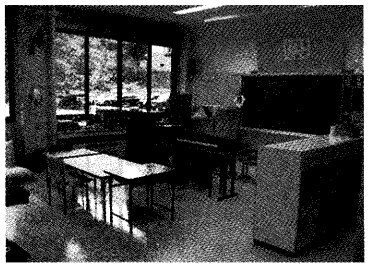

写真１　構造化された教室

2．テーマ設定の理由

（１）子どもの実態と保護者の願い

グループ学習とは「ことば」「かず」を中心に個に応じて必要な内容を小集団で一緒に学習する時間である。本研究は、小学部２組の２年生２名、４年生１名、計３名（１学期は３年生１名を含む計４名であったが他県へ転校）で編成されたグループ学習を対象とする。担当教師は２組の担任２名である。個別に取り組む時間を設けたが４月当初は慣れない教室、慣れない人、と教室に入ることも難しかった。まして、一緒に活動という部分では、教師との１対１でのかかわりも関係作りが課題であった。保護者も、人とのかかわりがもてるようになることを強く希望しており（右表）、少人数で教師とかかわることのできるグループ学習の時間に本研究を実践することにした。

表１　個別の指導計画：保護者の願いより抜粋

Y男	待つことができる、先生とのコミュニケーション 興味のあることから文字や数字の学習につなげる 絵カードから少しずつ文字カードの理解へ移行 順番の理解、相手を思いやる気持ちをもつ 友だちに興味をもつ、集団参加ができるように
K男	健康に関すること、体力の増進、 意思を伝えること、指示を理解すること
N子	教室や友だちに慣れその上で進めていって欲しい 性格、人との関係、気持ちの安定、予定の理解

（２）教師の願い

子どもたちが、周囲の人に思いを伝えられない、わかってもらえないということは、とてもストレスを感じ困惑するつらい状況なのではないだろうか。小学部２組は児童６名（２学期以降５名）であるが、それぞれの個のぶつかり合いもあり、子ども同士の人間関係もなかなか難しい。そこで、学級活動の前段階としても、このグループ学習での小集団活動が、人と心の通った豊かなかかわりをもてる活動になることを願ってこのようなテーマを設定した。

昨年度の研究より、子どもたちには五感を刺激し、身体を媒介（非言語を媒介）とするダンス活動を通して、コミュニケーションをとったり、楽しんだり、広げたりすることが有効だったと考えている。また、このテーマを設定した理由の一つに、私自身がダンスが好きであり子どもたちと楽しさを共有できることもある。

（３）グループ学習の時間での実態把握

写真２　ラーメン作り

１学期は個に応じた対応を中心とした、児童の実態把握の期間とした。当初、グループ学習のメンバーがバラバラな状態であった（図１）。しかし、グループ学習の個に合わせた「ことば・かず」などの課題を含むマンツーマンの時間やそれまでの誘いかけや自発遊びへの介入を通したコミュニケーションを重ねた結果、少しずつ信頼関係が築き上げられていった。児童は、教師と１対１でなら安心してかかわることができるようになった。６月後半にどうにか行うことができた小集団の活動は、学校近くの公園までの**散歩と調理**（ラーメン作り）である。小集団とはいっても、同じ活動を同時にすることはできたが、子ども同士のかかわりは、ほとんど見られなかった（図２）。

なお、５月にＹ男を対象児とした卒業論文を書きたいという学生の申し出が吉川一義氏を通してあり、大学生の稲生玲子氏（図ではＧと表記）が５月に参観し、６月からこの時間の研究協力者として参加することになったことを明記しておきたい。

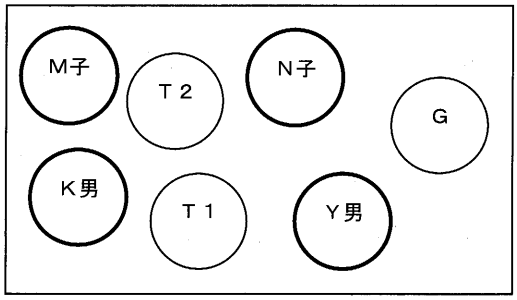

図１　１学期当初の状態（個が独立）

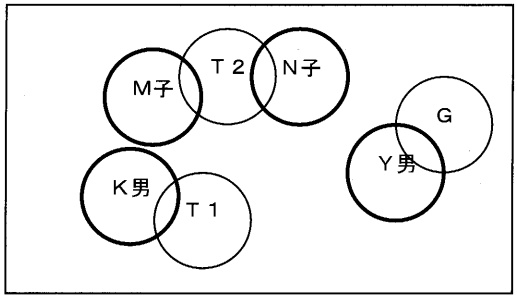

図２　１学期末の状態（１対１の信頼関係成立）

本研究では、コミュニケーションを次のように捉え大切にしている（図３）。子どもが発信しているが、教師まで届かないことがある。原因はいろいろ考えられるが、表情の変化だったり、指差しだったり、微弱な変化だったりと、発信が教師まで確実には伝わらないことが多い。このときに、子どもの矢印を到達させようとするのではなく、教師自身が矢印を伸ばす努力をする。子どもの言いたいことをくみ取り、子どもの気持ちを受け止める。どんなに弱い発信であっても教師がしっかり見つけ受け止められるかどうか、これは教師の力量にかかっている。矢印と矢印がぶつかり合ったところに生まれるコミュニケーションこそが、子どもの発達にとって大切なものである。この経験の積み重ねから人の温かさを知り、信頼関係が築き上げられると考えている。

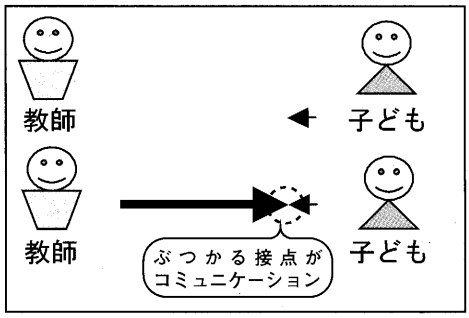

図３　コミュニケーションの捉え方

（４）題材の選択

２学期からは子どもたちの実態から得意とする身体活動、音楽活動を合わせもつ**「ダンス活動」**を活動の基盤として取り入れることにした。

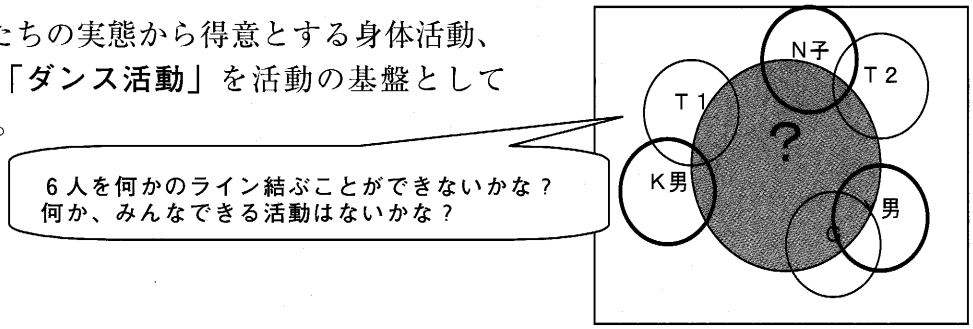

図４　題材選択
（全員が活動にかかわる）

3．ねらい

（1）活動のねらい

・踊ることに興味をもち、楽しんで身体を動かす
・教師と一緒に身体を動かし、共感しあえるコミュニケーション経験を積む
・教師や友だちの様子に興味をもつ
・それぞれの好きな活動をする中で楽しさを共有する
・友だちの楽しみも一緒に味わう

（2）児童の実態と活動の個人のねらい

氏名 学年	教師とのかかわり	友だちとの かかわり	身体活動・音楽活動	個人のねらい
Y男 小2	1対1ならかかわることができ、自分の要求をどうにか伝えようという意欲がある	あまり興味がなく、かかわられると嫌がる	自由に走ることが好きで、リトミックに参加できることもある	ダンス活動に興味をもち自分から踊る 友だちとかかわりあう
K男 小2	人見知りはあるが人なつっこく、ある程度かかわると自分からかかわることが多くなる	大きな声を恐れるが、気の合う子どもとは一緒に笑い合うこともある	体力はあまりないが、音楽に合わせた活動を好み意欲的に踊る	ダンス活動を楽しみ、教師や友だちの様子を見ながら踊る 友だちとかかわりあう
N子 小4	教師の様子を見て、好みの教師の膝に座ったり、おんぶなどを求めたりする	なるべく離れていてかかわらない	自分で自由に走ること、アスレチックやおんぶなどで揺らされることを好む	ダンス活動に興味をもち教師と一緒に身体を動かす 友だちに興味をもち見る

4．今年度の取り組み

（1）活動時間

2学期～3学期：水曜日：4限目「グループ学習」
ダンス活動「いっしょにおどろう♪」

写真3　アンパンマンとおどろう

（2）授業計画

		配時　18時
第一次	大好きなアンパンマンとおどろう	5時
第二次	自分流におどってみよう	4時
第三次	いっしょにおどろう	4時
第四時	えらんでおどろう	5時

（公開授業　4／4）

（3）手だて

・子どもが興味あることを題材に取り入れていく
・教師が楽しそうにダンス活動に取り組んでいる様子を見せる
・信頼関係のある教師がダンス活動に誘ったり、活動中寄り添ったりしてかかわりをもちやすくする
・子どもからの発信があれば尊重し、活動意欲が高まるように以降の活動に積極的に生かしていく

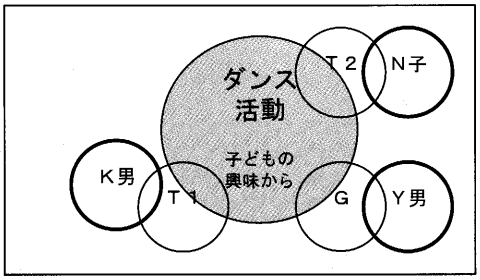

図5　手だて（Tが先ず活動に参加）

（４）実践と研究の経過

２学期は８回ダンス活動を実践した

あそびの時間の活動で子どもたちが大好きなアンパンマンのＤＶＤを楽しそうに見ているのでこの題材を選択

次	時	日程	ダンス活動	子どもの様子と発信	準備物、その他
一　大好きなアンパンマンと踊ろう	1	９月20日（火）	てのひら体操 サンサン体操	Ｙ男：**バタコさんのお面を選ぶ** Ｋ男：とてもうれしそうに踊っていた Ｎ子：初めてのことは苦手で教師と一緒にＧボールに座り不思議そうだった ビデオの画面をよく見ていた	アンパンマンの仲間たちのお面とマント Ｇボール （教育実習生授業）
	2	９月21日（水）	てのひら体操 サンサン体操	Ｙ男：見通しをもちお面を選び笑顔で踊る Ｋ男：とてもうれしそうにＴＶの前で踊っていた Ｎ子：教師と一緒にＧボールに座り不思議そうだった ビデオの画面をよく見ていた	〃
	3	９月28日（水）	てのひら体操 サンサン体操	Ｙ男：見通しをもちお面を選び、着ぐるみ登場ではジャンプして喜んでいた Ｋ男：マントを嫌がり何もつけずに踊っていた。気ぐるみを見て喜び、去った後も廊下に出て２階まで探しに行った Ｎ子：買物後参加し、おやつを食べていた。教師と一緒にＧボールに座った	〃 着ぐるみアンパンマン登場
	4	10月５日（水）	てのひら体操 サンサン体操 めざまし体操	Ｙ男：**めざまし体操があるのを見つけ選んで**ＤＶＤを見て楽しんでいた Ｋ男：最初ロフトベットの上にいたが降りてきてＹ男の曲に合わせて踊っていた Ｎ子：少し慣れ、友だちの様子を見ることもあった	着ぐるみアンパンマン登場
	5	10月12日（水）	ＮＨＫおかあさんといっしょ てのひら体操 サンサン体操	Ｙ男：その前の休み時間に20分程見ていたのでこの時間は少し飽き気味だった Ｋ男：「たまごのうた」を歌い踊っていた Ｎ子：うれしそうに飛び石渡りをするが勢いあまって廊下に行ってしまうことが多い	アンパンマン登場 ブロックやお風呂マット、イスで飛び石渡り 徳山氏参観
二　自分流に踊ってみよう	1	11月２日（水）	手遊び歌ＣＤ （映像なし） よさこい （映像なし） シーツブランコ （童謡ＣＤ）	Ｙ男：よさこいになったら鳴子を持ってイキイキと参加 Ｋ男：**アンパンマン人形をシーツに乗せたり鳴子をもたせたりして、見立てて楽しむ** Ｎ子：**シーツブランコやボールが好き、自分でアイデアを出し教師に身振りで要求し身体を動かそうとする**	シーツブランコは一人ずつしかできなかった Ｇボール 最初に静の部分をいれようと思うが静にならず
	2	12月７日（水） 授業研究	よさこい（映像有） バレエ（マイムマイム） シーツブランコ風ゴロゴロ遊具	Ｙ男：よさこいのＤＶＤを見てやや驚き気味だったが、気持ちを整えると鳴子持ってきて教師と一緒に参加 Ｋ男：どの活動も元気いっぱいに踊った Ｎ子：**シーツブランコやボールが好き、自分でアイデアを出し教師に身振りで要求し身体を動かそうとする**	吉川氏ビデオ撮影 シーツブランコ風ごろごろ遊具 徳山氏参観
	3	12月14日（水）	よさこい（映像有） バレエ（新マイムマイム）	雪のためスクールバスが遅れ日程がやや遅れる二人とも雪遊び（今年初）に夢中になった後での活動で疲れぎみだった。 Ｙ男：泣きっぱなし。自転車に乗りたかったようだが雪のため止めたことが原因。何度も教師におんぶされながら、時々気分が落ち着き笑顔で参加していた。 Ｋ男：よさこいバレエを元気いっぱいに踊ったが、Ｙ男が途中でＤＶＤを止めるので乗り切れない部分があった アンパンマンをリクエスト Ｎ子：雪のため欠席	吉川氏ビデオ撮影 広角レンズ使用 徳山氏参加予定だったがＹ男が大泣きのためタイミングが図れなく、最後の方に登場となった

めざまし体操を選んだのでそろそろ違うダンスを選ぶかと新しいものも準備した

10月13日にＹ男が自分からテープをもって来たので設定した

映像がないと一緒に踊りにくいので映像を入手した

すのこを使い子ども２人乗れる手作り遊具を準備した

鑑賞会バレエ鑑賞会で、Ｙ男もＫ男も自主的に舞台にあがって飛び入り参加し意欲的だったので準備した

前回のマイムマイムが見にくいという反省から、徳山氏に撮影させてもらった

（5）ダンス活動中と関連した学校生活にかかわるエピソード

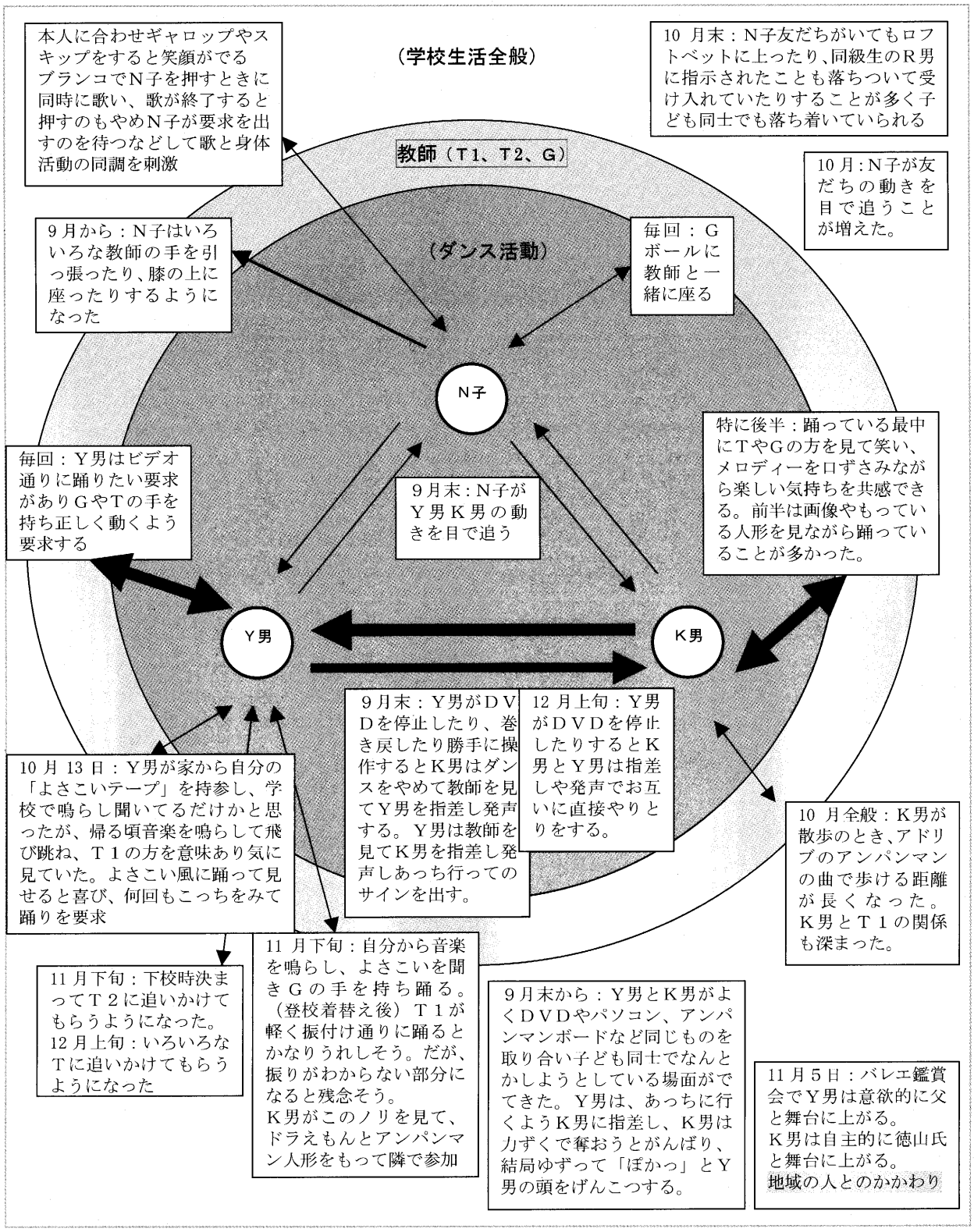

図 6　エピソード相関図

教師とのやりとりも増え、1学期ほとんど見られなかった子どもたち同士のかかわりも見られるようになった。Y男とK男は、教師を介したやりとりから直接のやりとりへと発展した。N子は教師と一緒にいながら、友だちの様子をちらりと見るだけだったが、動きを目で追うようにと発展した。

この活動でかかわりの変化が増えてきた。そして、その関係は徐々に下図のように人と人との距離が近づいてきたと考えられる。

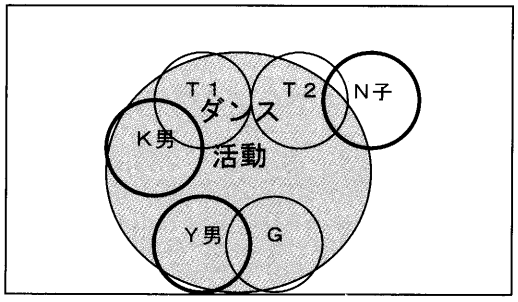

図７　２学期中間の状態（信頼関係のあるＴと一緒にダンス活動）

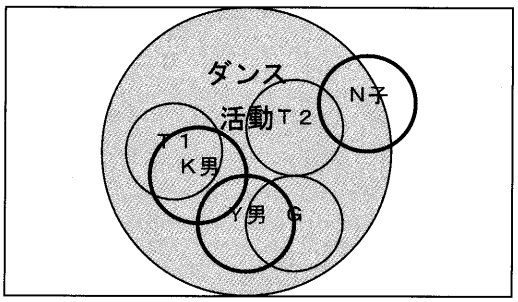

図８　２学期末の状態（人との距離接近）

５．考察とまとめ

（１）子どもたちの変化

ここでは、ICF 概念の枠組みを子どもたちにあてはめ、一人一人の活動性が向上したかどうか、同時にそのことにより参加と心身機能への影響がどのように循環していたかを検討し生活機能全体について考えてみたい。一人一人のエピソードより影響があったと思われる特定の行動について振り返り整理する。（図９：Ｎ子、図11：Ｙ男、図12：Ｋ男）

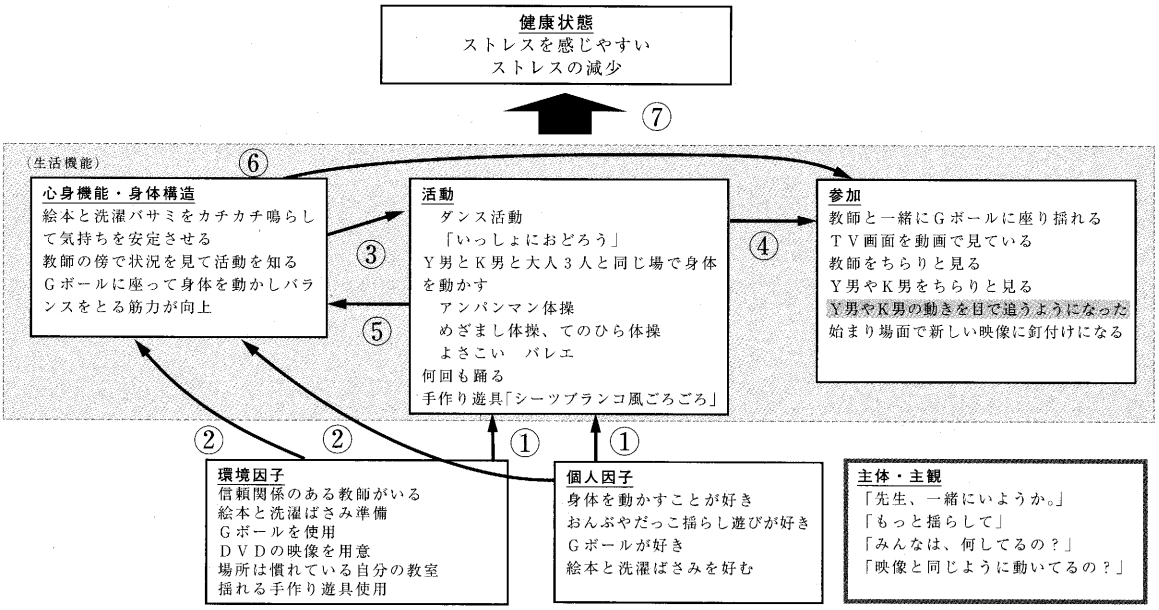

図９　Ｎ子の場合（変化の見られた行動：Ｙ男とＫ男の動きを目で追うようになった）

Ｎ子は、信頼関係のある教師と一緒に落ち着いてダンス活動の場にいられることから始まり、絵本と洗濯ばさみをカチカチならし気持ちを調整しながら、穏やかにすごせる場となることを重要視した（図９）。環境因子と個人因子から活動内容を設定し（→①）、同時に心身機能の気持ちを安定できることにも働きかけた（→②）。安定しているからこそ活動へ参加意欲が高まり（→③）教師と一緒にＧボールに乗って身体を揺らしたり揺らされたりすることが楽しくなる（→④）。また、活動が楽しいから気持ちも安定してくる（→⑤）。安定していると絵本と洗濯ばさみから目を離し、周囲の様子もより見るゆとりが出てくる。安定する

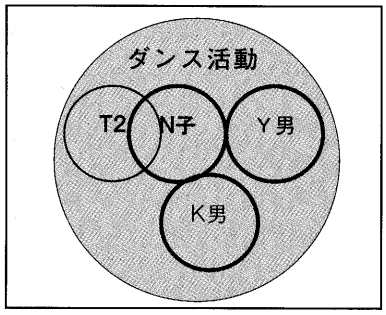

図10　友だちを意識する

に従い、友だちやDVD映像に注目する時間が長くなり、一瞬見るだけだったのに動きを目で追って見られるようになる（→⑥）。友だちに関心を示さなかったN子だが、存在を受け入れ意識できてきたのではないか（図10）。このことから、**良循環が生じ生活機能全般（心身機能・活動・参加）が全体的に向上したと言うことができる**。そして、その結果、活動参加時に感じるストレスも減少し、健康状態も良くなるのではないか（→⑦）。今後、N子がこの活動が居心地のいいと認識し、音楽やダンス等の中から好きな活動が増え、個人因子からの可能性が増えることを期待すると同時に工夫していきたい。

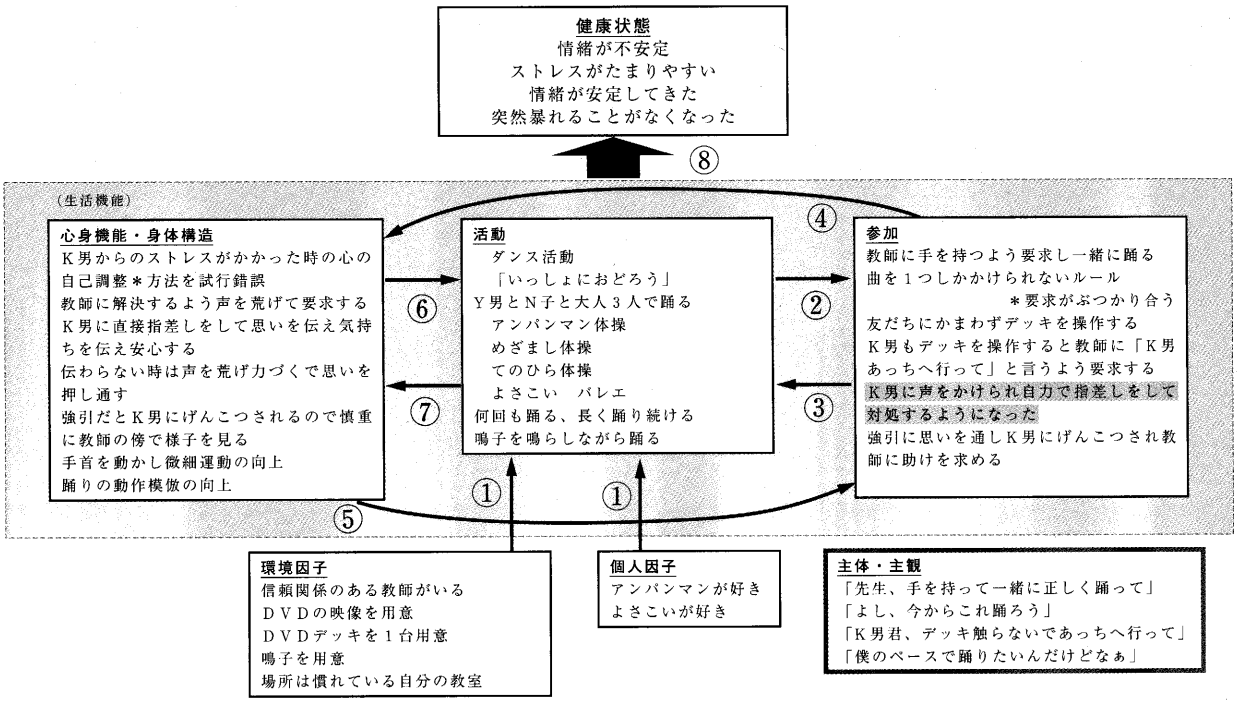

図11　Y男の場合（変化の見られた行動：K男に声をかけられ自分で対処するようになった）

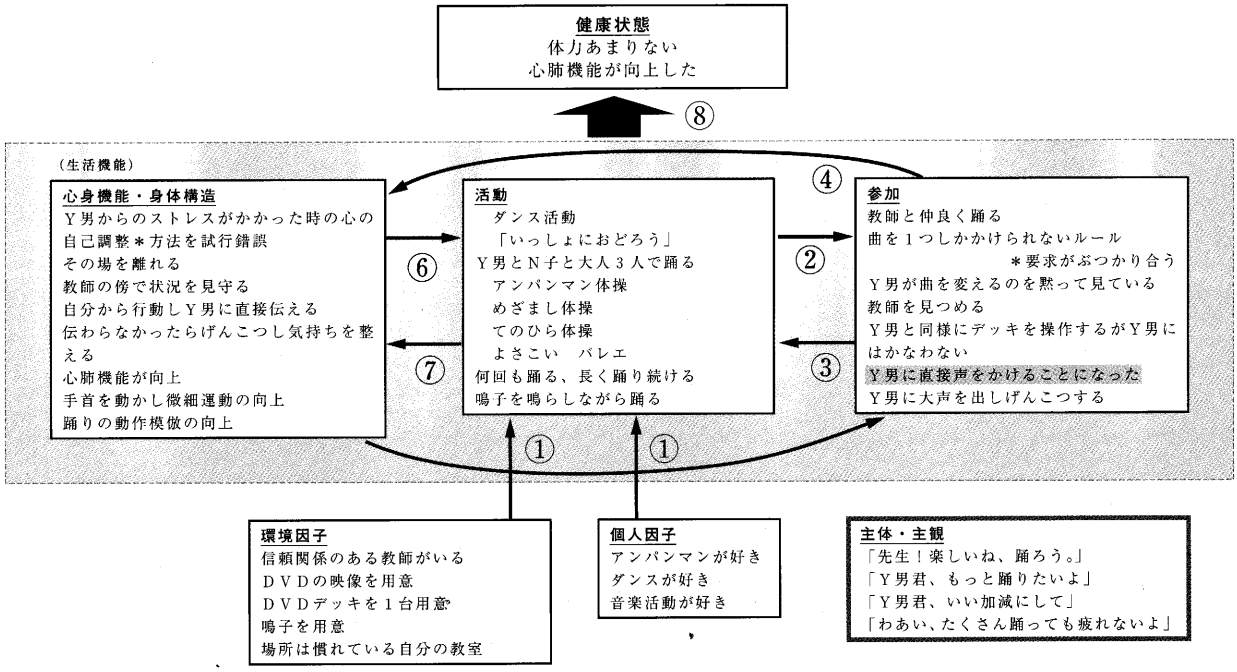

図12　K男の場合（変化の見られた行動：Y男に直接声をかけるようになった）

Ｙ男とＫ男が、お互いに相手とのかかわり自分の要求を伝え合うようになったことが非常に興味深い（図11、図12）。詳細を補足すると、初めの頃は、Ｙ男は友だちに無関心でＫ男が楽しく踊っていてもデッキを操作し踊りを途切れさせてしまう。それをＫ男は気持ちを表出せずただ見守り、それが続くと踊りをやめてその場を立ち去っていた（図13）。教師の接し方を見て少しずつ自分からサインを直接出し合うことが多くなっていった。最初は、Ｙ男の意志表出が強く、Ｋ男が自分で考えてＹ男に好きな曲をかけてもらおうとするがうまく行かず、結局Ｙ男に従いその場を離れたり教師の後ろにくっついたりしていた（図14）。ところが、うまくいかないことが続くとＫ男はＹ男に軽くげんこつをした後気持ちを整えて去って行くようになり、Ｙ男が泣き顔になることを知るとその場でＹ男が離れるのを待つようになった。力強い要求のぶつかり合いが始まったのである（図15）。

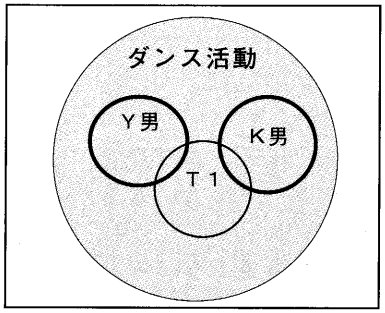

図13　各々が教師とかかわる

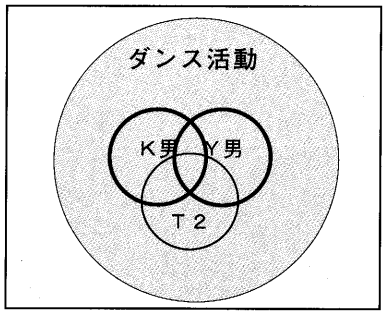

図14　教師を介してかかわる

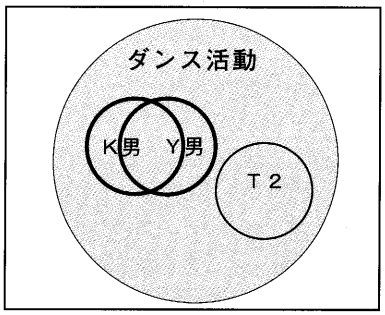

図15　子ども同士直接かかわる

これは、環境因子や個人因子から意欲的に参加できるように設定されているダンス活動であることから、活動水準が高まったこと（→①）。そして意欲が高まったことにより、友だちとの間に多少の困難があっても解決しようとする参加意欲が高まったこと（→②）、解決したら好きな踊りを踊れること（→③）、また、友だちとの交渉やルールを守るにあたっての気持ちの調整の仕方を自分なりに試行錯誤して獲得し（→④）同時に友だちとの交渉力もついてくる（→⑤）、気持ちの調整ができるからダンス活動への参加への気持ちも高まり（→⑥）継続時間も長くなるので心肺機能が向上したり道具（鳴子）の上手に操作できるようになったり身体構造にもいい影響がでている（→⑦）。このことから、**良循環が生じ生活機能全般（心身機能・活動・参加）が全体的に向上したと言うことができる。**そして、その結果健康状態も良くなる（→⑧）。健康状態も良くなれば、さらに良循環が生じる活動へとつながり、今後の活動に可能性が広がり豊かな生活へと結びついていくことが期待できるのではないか。今後、Ｙ男とＫ男の気持ちの調整方法が変化していくことやかかわり方が発展していくことが予想され、注目していきたいところである。

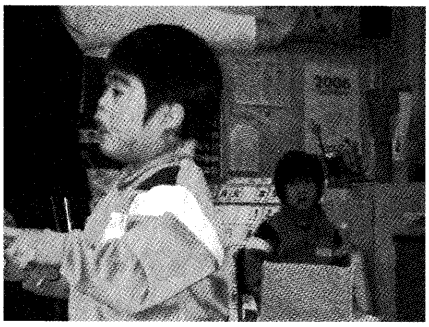

写真４　よさこいを踊るＫ男と様子を見るＮ子

写真５　よさこいを教師と一緒に踊るＹ男

（２）Ｙ男に見る活動の１年間の変化

Ｙ児について、１年間の変化をＩＣＦ関連図にあてはめ変化をみていくことにする(図16)。４月当初、ほとんどの学校生活をメディアルームでパソコンをしてすごし、情緒も不安定で、泣き叫んでいることも多かったが、パソコンを教室に置き環境を整えると教室ですごす時間も少しずつ増えた。そのことで、他の児童がする活動を目にする機会が増えたことが良循環の始まりであった。

２学期、なるべく教師がゆったりかかわる時間を保障し、本児が好きなアンパンマンのダンスを踊る等、少人数でかかわることのできる活動を続けたところ（１）で述べたような変化がでてきた。教師や友だちとの交渉能力や気持ちを自己調整する力が高まり、健康状態もよくなり、生活機能全般（心身機能・活動・参加）が全体的に向上した（図11)。授業以外でもＫ男とビデオデッキを巡るやりとりも増え、なかよし広場や小ホール、教室でも教師や友だちと穏やかにすごすＹ男の姿も増え学校生活全体に広がりを見せている。同時に家庭でも兄弟の友だちと一緒にすごしたり、外食やドライブにも出かけたりできるようになったようだ。今後、更なる生活の広がりが期待できる。

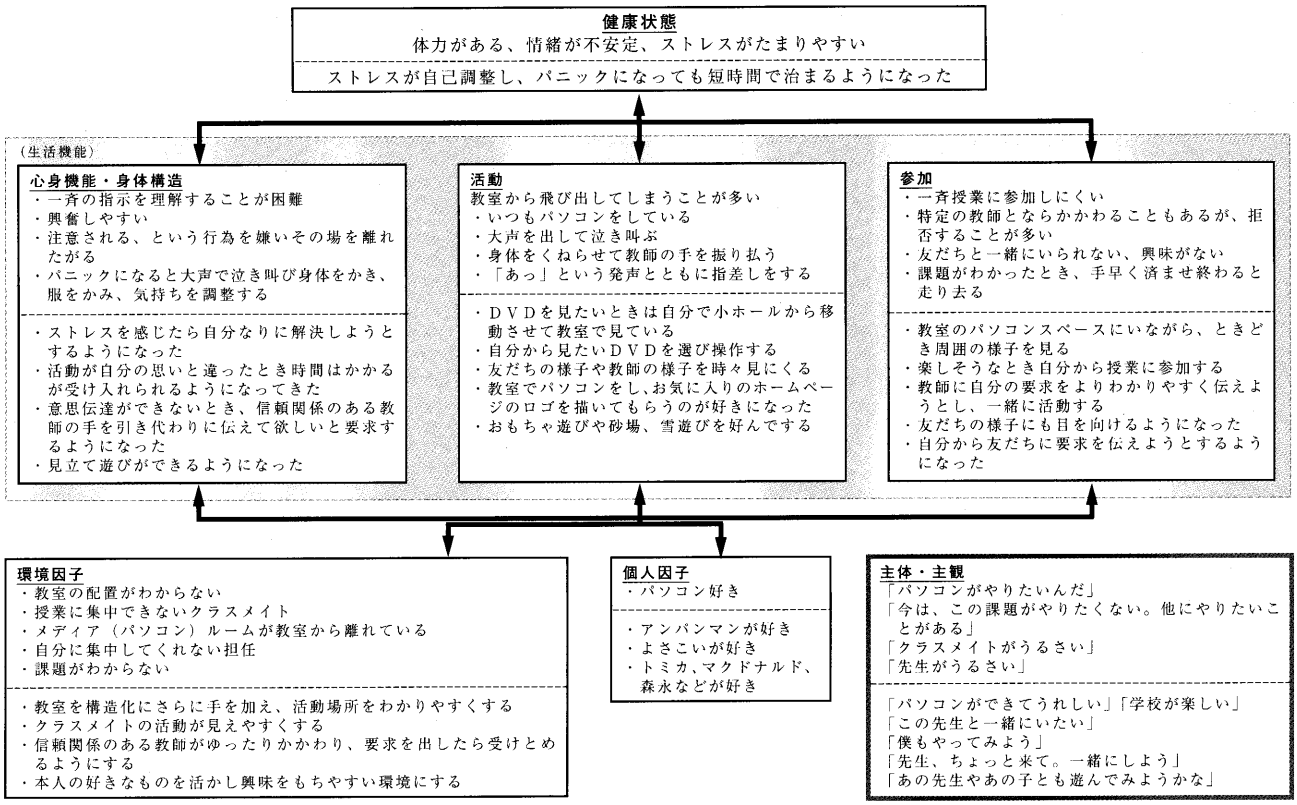

図16　Ｙ児の１年間の変化―１学期最初の現状把握（上段）と２学期末の実態（下段）

（３）保護者の願いへの寄り添い

グループの時間にかかわる願いのうち、ダンス活動が成長の一因となったと考えられる項目をチェックした（表２)。このように、保護者の願いに沿って子どもたちが成長するための支援を実践することができたと考えている。

表２　年度当初の保護者の願いより抜粋

Ｙ男	健康に関すること、体力の増進、 意思を伝えること、指示を理解すること
Ｋ男	待つことができる、先生とのコミュニケーション 興味のあることから文字や数字の学習につなげる 絵カードから少しずつ文字カードの理解へ移行 順番の理解、相手を思いやる気持ちをもつ 友だちに興味をもつ、集団参加ができるように
Ｎ子	教室や友だちに慣れその上で進めていって欲しい 性格、人との関係、気持ちの安定、予定の理解

（４） ３学期の実践に向けて

児童一人一人の活動意欲を高めるためにも手だてとして以下のようなことに心がけて今後の授業に臨むことにする。

・ダンス専門家の徳山氏と協力し児童３名の好きな動作を盛り込み、児童と教師がかかわることのできるオリジナルダンスを考える。指導者２名と徳山氏の出演ＤＶＤを制作する。
・主にＮ子の活動性が高まることを期待し、Ｇボールを使用した手作り遊具を製作する。
・ＴＶ画面を注視できるので、リアルタイムで自分の動作や友だちの活動も見られるようビデオカメラを使用した環境を設定する。

６．おわりに～ダンス活動「いっしょにおどろう♪」から広がる可能性と期待～

今後実践を重ねると、徐々に一人一人が近づき、やがては全員が同じところに重なり合うように存在することが理想である（図17）。しかしこれは極論でありここまで求めているわけではない。どこまで近づき一緒にいられるようになるか、できる限り近づき少しでも重なり合う部分がある人が何人いるかを重要視したい。

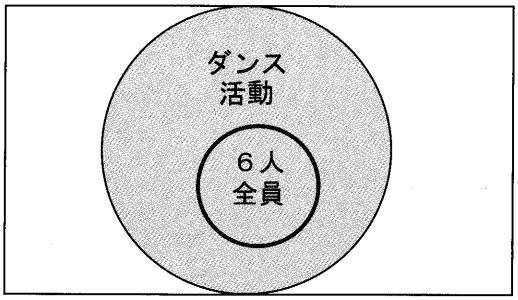

図17　究極の理想の状態（全員一致）

そして、この活動の場をダンス活動のみに留まらず、他の活動へと移行したり、かかわる人を代えたり変化を加えることができ、かかわる人が増えクラス全体の活動であっても参加できるようになって欲しい（図18）。そして、将来的には地域社会の小集団での活動に参加できるようになることを願っている（図19）。

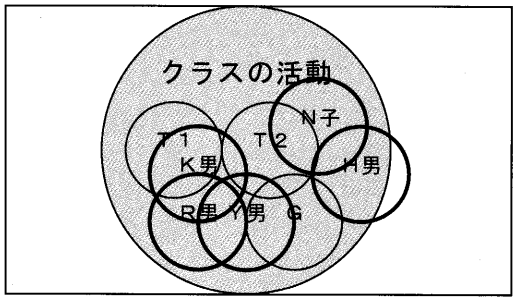

図18　近未来：活動基盤の変化（クラス）

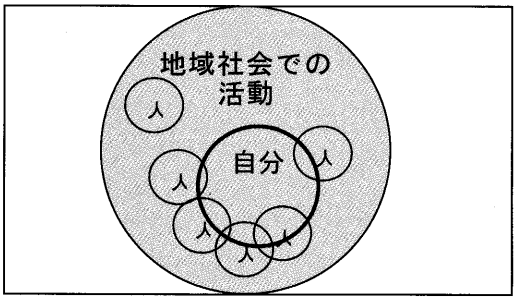

図19　遠い未来：活動基盤の変化(地域社会)

一人から二人、二人から三人と、その過程の中でも少しずつ少しずつ、しかも確実なスモールステップを踏んでいくことを大切にしてきた。この活動から築いたコミュニケーションこそ、子どもたちが豊かに成長する上で大切な基盤となると信じている。このような信頼関係が成立したコミュニケーションの土台が確実であれば、その後、いろいろな人と出会いいろいろな活動をするにあたっても、その人のもつ可能性を最大に繰り広げて行くことができるのではないだろうか。

本研究ではダンス活動こそがコミュニケーションだと言いたいわけではない。子どもの好きなこと、子どもの興味から始めてみると、子どもの伝えたいことが大人に確実に伝わり、子どもに返してあげられることが多くなる。矢印と矢印がぶつかるコミュニケーション経験（図３）を子どもたちにたくさん経験してもらえれば、と願っている。障害の有無や老若男女にかかわらず、人と快適なかかわりをもち、豊かな心でかかわりあう経験があればこそ、生活機能全般の水準が高まり生活全般について活性化され、それぞれにとって快適で豊かな生活を送ることにつながるのではないだろうか。

〈参考文献〉ＩＣＦ（国際生活機能分類）活用の試み～障害のある子どもの支援を中心に～
独立行政法人　国立特殊教育総合研究所　世界保健機関（ＷＨＯ）編著